

音符を使わない初心者向けピアノ学習法の提案

—保育士をめざす音符が読めない学生のために—

田 島 孝 一

A New Piano Method Proposal for Beginners without Notes

—For Junior College Students in a Department Childhood and Care Who Can't Read Music—

TAJIMA Koichi

Abstract

To most piano beginners, it is usual to use music notes. A plenty of students who are studying at a college in the Department of Childhood and Care in Japan, are confused to read music notes. But many cases on self learners and blind musicians (for example, a very famous jazz player Mr. Stevie Wonder or Mr. Nobuyuki Tsujii who is the winner in the Van Cliburn International Competition last year) playing without read music notes is very usual. So in this paper, I've suggested my own idea for piano exercise way without music notes at the start of learning. The peculiarity is using only 5 numbers and very few my original marks. This idea makes students reduce the burden of incomprehensible notes and musical signs. The characteristic points of this way are following; 1. Use many famous infant songs. 2. It makes learners release from many annoys to decode many music notes. 3. They can study piano with pleasure through the songs which are well-known. 4. The songs are very useful on their childcare training at the preschool. 5. The success leads the students to increase their motivation to the next exercise. The main exercise ways are following; 1. In spite of notes, using only 1-5 finger numbers (for example 533-|422-|1234|555-|) and very few directional marks for finger moving (for example, 1 ↵ means to put the right thumb in the hand) as the advices for fingers moving. 2. Change the hand positions very often to prepare 5 fingers always set above 5 keys. 3. Reading the 5 numbers, always make learner's eyes release from watching many keys and many notes. 4. The liberation make learner's mind free and make their learning easy. 5. Music study by reading and writing music notes. These study steps are very similar with studying one's mother language. 1. At first, infants learn a word (melody) through their ears. 2. Next, they imitate the word (melody) on their voice (singing and piano playing). On every these cases, infants don't use any letters. (On this original way also beginners don't use any notes.) 3. After he can speak (play) well, he learns letters (notes). So, I suggest this original piano method as the most natural and normal way. To read musical notes in well-known songs is the best way to study music notations.

キーワード：初歩ピアノ学習法、保育士養成課程、幼児の歌、数字譜、奏法譜

Key words: piano method for beginners, department of childhood and care, infant songs, figure notation, tablature

本学人間科学部心理・行動科学科准教授

連絡先：田島孝一 〒662-8505 西宮市岡田山4-1 神戸女学院大学人間科学部心理・行動科学科
k-tajima@mail.kobe-c.ac.jp

序章 音符に基づかない初歩ピアノ学習法

さまざまな教則本による従来のピアノの学習法では、日本ではごく一部でしか使われていない、絵で音楽表記された教材で始めるクルタークやルンツェなどのマイナーな教本や、低年齢幼児向けの教本中、数少ない最初期に使われる補助的導入書を除き、そのほとんどは音符や楽譜を読むことから始められる。だが本当に楽譜を読めないと音楽は演奏できないのだろうか。実際には、楽譜が読めない有名なシンガーソングライターも珍しくはないし、「ネコふんじゃった」などは、楽譜などまったく読めない、数えきれない多くの子どもたちがピアノを弾いて楽しんでいるのである。

このように、もし①よく聞き覚えている曲（単旋律）があり、②その弾き方さえ分かれば、楽譜などなくても、ふつうは誰でも簡単にピアノを弾くことができるのである。もちろん楽譜は、知らない曲を知るためには必要なものであり、それを解読する能力は大変便利なものであり、より多くの曲を弾くためにも必要なものである。しかし、初めてピアノを学習する者にとって、大好きな曲を自分の手指で奏でるより以前に、「さあ楽譜に載っている知らない曲をお勉強しましょう」「そのために楽譜を読むお勉強をしましょう」では、多くの子どもや大人でさえもうんざりして、時には学習意欲を失ってしまうのも無理はないだろう。

これを仮に人間がことばを学び始めることに例えてみれば、その学習順序の異常さがよくわかるのではないだろうか。乳幼児にことばを教える時に、まず文字を教えることはない。まず目についたものの名前を、ことばとして耳から覚えることから始められる。文字を教わり始めるのは通常その3～5年後くらいであり、その頃の幼児は、すでにそれまでに覚えた言葉を駆使して、自分の思ったことをおしゃべりとして、十分伝えられる能力を身に付けている。近年、英語などの外国語学習についても、一部ではこれと似た学習順序がとられることもあるようだ。言語との共通点を指摘されている¹音楽もまた、それだけで人間の感情を表現し伝えることは十分可能なことであり、同じ順序で教育されてもおかしくはないだろう。

筆者は本年、ある短期大学で久しぶりに保育士養成課程に学ぶ学生たちに音楽理論を教える体験をしているが、ひと昔前の学生たちのレベルと違って、読譜力は大きく低下していた。学生の一部には、アレルギーとも言えるほど、オタマジャクシへの抵抗感は増大している。小中（高）での教育レベルの低下による、このような学生の音楽能力低下は、そこに長年勤務されている教授も同様に嘆いておられたので、どうやら筆者がかつて担当していた大学との能力レベルの差ではなさそうだ。振り返ってみればはるか昔からも、読譜力の乏しい学生たちは存在していた。今やそんなレベルの学生たちが大半となってしまっているようである。これらの楽譜が読めない多くの学生たちに、そんな不十分な読譜力のままでピアノ学習させることは、保育現場で心に余裕をもって弾けるほどの能力を身に付けさせることなど、どうしてできるはずがあるだろうか。初めてピアノに触れてから、わずか1年半～2年未満という超短期間で、採

用試験受験時に出題されるとの理由でバイエル教本などを学び、さらにリズム遊びのための曲集や、学生によってはブルグミュラーなど音楽表現のための曲集からもそれぞれ数曲ずつ学ばされているのが多くの養成現場でのやり方である。このような急ごしらえの未熟な能力で保育士免許を与えることは、無免許運転にも値するとの古くからの指摘もある。保育の場でピアノが役立つためには、鍵盤や楽譜を見ずに子どもたちの様子を見ながら、こどもたちの反応に合わせて弾けるようにするなど、ある程度即興的にピアノを自在に扱えるような、いわば応用学習を本来はしなければならないはずなのである。

しかしかにかに不合理な要素をはらんでいたとしても、現実にはこのような不十分な能力のまま卒業させ、公然と国家資格が与えられているのだから、その養成を託された教育機関は、立場上それに対応せざるを得ないのが実情である。その結果、そのような強引なカリキュラムにも盲従せざるを得ない学生たちが、日々いかに悲惨な思いを味わいながら学習を強いられているか、おそらく想像を絶するほど苦悩があるに違いない。このような現実を深く踏まえてみると、保育士養成の現場では、その必要性に合った、しかも学習者に負担が少なく、より合理的に速習でき、即役立てられる有用なピアノ学習法や教則本がどうしても必要になってくる。そのため筆者は、読譜力がまったくない学生たちでも無理なく学べるよう、まずはピアノ学習上最も重要な導入期の方法として、次のような特徴をもった学習法から始めることがより望ましいのではないかと考えた。

- ①学習者たちがよく知っている子どもの歌を教材にすることにより
- ②なじみのある曲を楽しく弾くことから学習が始められ
- ③複雑な五線譜に代えて、わずか1～5の指番号を読み取る奏法譜を見ながら弾けてしまう。
- ④聞いたこともない退屈な旋律の練習課題をいやいや弾かされることもなく
- ⑤難解な音符や楽譜を読むわずらわしさや不得手意識から開放され
- ⑥思いのほかたやすく弾けたという達成感は
- ⑦さらに次の学習へ向かう意欲が増す。
- ⑧完成した曲は2年次の保育実習の場でもそのまま役立てられ
- ⑨即興的にリズム変奏できるほどの、心と技術・能力の余裕へとつながる

このような、学習者の困難さを大幅に軽減し、さらに学習意欲を高めることのできる、新しいピアノ教材の開発が必要であると考えに至った。もし学習者たちがそれによりいい結果を出せたならば、彼・彼女らはより音楽的な表現をするだけの心の余裕を生み出すことができるだろう。翻って考えて見ると、言葉の習得過程の観点から見てより自然ともいえるこのような学習法は、幼いピアノ学習者たちにとっても、おそらく楽しい体験学習の教材として使用できるものになるのではないだろうか。

次にその学習法についてその特徴を概略的に示すと、

- ①複雑難解な五線譜や音符を読み取るかわりに、教材に指示された通り1～5の指番号どお

り指を動かせばよい

- ②各指の間隔は指定されない限り拡張はせずに
- ③指示通りの指が使えるよう、1～5指は常に使用する鍵盤上に待機している状態にする
- ④基本的に指間を拡張しないため、指が届かない音を弾く時は、ポジション移動により指を到達させる
- ⑤特別な記号は、指の準備をより円滑にするため、指の運びを図的に表した若干の補助記号を使用するだけ
- ⑥以上により判読し覚える記号の数も少なく、1～5の指の指示さえ間違わずに使っていけば、使用する指の混乱がなくなり、最初歩学習の段階から、鍵盤を見ないで弾くブラインドタッチが常態となる（始終指番号を見ていないと弾けないため）
- ⑦鍵盤や楽譜に縛られない弾き方は、幼児の動きを観察し、それに合わせられる実用力へつながら（暗譜に至るのが速いため）
- ⑧指操作の混乱がないため心にゆとりが生まれ、常に学習対象や課題の把握が容易になり、より確実に楽しんで演奏できる
- ⑨一曲の学習初期段階から右手だけならほぼ弾けてしまうため、早期に覚えて弾けるようになる（勘所として覚えられる）

などである。別表現でさらに重ねていえば

- ①不慣れな記号としての音符を読むのではなく、見慣れた5つの数字により使うべき指が把握される
- ②実際にどの指を動かして弾けばいいかという具体的で重要な情報を常に把握して弾ける
- ③少しでもこの方法に慣れると、常に音楽を感じながら、初心者でも楽しんでできるようになる

このように抽象的な音符を読みとる五線譜による学習法に代えて、実際にどの指を動かして弾けばいいかという、いわば身体を使つての「運動」を行う時のように、その動きを身につけるために必要な、学習のポイントとなる重要な情報を、即座にもらさず学習者たちに把握させることに、ピアノ学習の主眼を置いた方法であるともいえるのである。

読譜中心の従来の方法によると、まずは音符という見慣れない抽象的な記号を解読するという不慣れな学習に対し、初心者たちは必要以上に大きな集中力と精神的エネルギーを費やさなければならない。しかもその上に、それを具体的にどの指をどう動かしてピアノを弾くかという、初歩学習者にとって頭の中が大混乱するほどの、不慣れで困難な学習課題を消化しなければならないのである。そのため場合によっては、楽譜解読の時点でエネルギーの大半が消費されてしまい、指の動きまでは十分に集中力が注がれない事態も起きてくるのではないか。実際そう思えるほど、初歩受講者たちの信じられないようなミスは、決して珍しくはない。

この状態を中学生が英語学習を始めた状態にあてはめて考えてみれば、次のような混乱状態にも少し似ているのではないだろうか。

- ①見慣れないABC（楽譜では音名・音高・音価などの音符）を解説しなければならない
- ②それを声（鍵盤の音）に出し、アクセントの位置（音価など）に注意して読ま（運指）なければならない
- ③1字ずつABCの羅列にしか見えないため、単語の意味（旋律としての把握）もわからないままであり、主語・述語・目的語などの品詞（たとえばフレーズやその切れ目、旋律の山など）をも判別しないで読んでみても、何を話して（弾いて）いるのか（音楽の起承転結など）自分でもわかっていない
- ④意味不明のままただ声に出しているだけという棒読み状態（人に具体的に伝わる語りをしている状態ではない）なので、本人もまったくおもしろくない

このように、実用状態でない英語学習者の様子と、未熟なピアノ学習者の様子との間には、いくつかの共通点が見られるのではないだろうか。

これに対して、

- ①まず言葉（旋律）を耳から覚え（＝学習対象の全体像を把握・認識する）
- ②模倣して声に出し（まず歌い、さらに歌いながら弾く）
- ③十分それに慣れてから（＝指の身体運動感覚による把握とその記憶）
- ④それをどう書きあらわすかを学習する（＝把握したことを音符や楽譜に筆記していく中で記譜を学ぶ）
- ⑤これらを行う回数を重ねていく中で、文字（音符）や文章（楽譜）を解説できるための学習を行い、無理なく文字（音符・楽譜）が読め、ことばや文章（音・音楽）を通じた自己表現としてできるようにする

このような順序こそが、興味を失わず確実に学習を続ける重要なポイントではないだろうか。すでにお気づきのこととは思いますが、この順序は、実は幼児が言葉を覚え記述することができていく順序ときわめて似ているのである。おそらく世界中の幼児たちが、ことばと文字を覚えていく過程になっているのではないと思われる。本論ではこの順序に沿って、従来の方法とは違った、新しいピアノ学習法を提案し提示していくことにする。

なお現実として、保育士や教員の採用試験でバイエルから出題されることが多いため、音符や楽譜を読みながらこの教本を学習しなければならないという重大な問題がある。その対処法としては、まずは楽譜を使わないで行なう学習法（例えば筆者がここで提案する方法など）により、ある程度ピアノが弾けるようになってから取り組むことを勧めたい。つまり、実際にピアノを弾くことに対し、この指番号で弾く方法などで手や身体感覚が少しは慣れた後に、続けてこの方法を極力バイエルにも適用していくことである。その学習の中で、音符や楽譜の意味を理解しながら学習を続けることも可能ではないだろう。

これに関連して、同じく子どもの初期学習のための教本としてよく使われてきたメソード・ローズについていえば、学習課題はすべてフランスの童謡が使われているようだ。これは、フランスの子どもたちにとってはなじみのある興味を引く曲が並べられているかもしれないが、

日本の子どもたちにとっては、まったく知らない曲ばかりである。そのためフランスの子どもたちには遊びの要素があるのだろうけれど、日本の子どもたちにとっては、つまらないお勉強の曲ばかりが並んでいて、そのページに描かれた絵以外にはあまり興味のないものではないか。

筆者がここで提案する初歩学習法では、教材曲はすべて日本の童謡または幼稚園などで歌われていて、そのほとんどが日本の子どもたちにおなじみの、楽しい歌ばかりが用いられる。この基本方針による教本ができれば、これまでにない新しい教本が生まれることになるかもしれない。

第1章 読譜の意味と必要性

第1章 ピアノ学習をするとき、通常は当然のようにほとんど何の疑問もなく使われている五線譜である。しかしこのように、“何の疑問もなく使用する”ことは、人間の知的行動を必要とする場合、ともすればそのものの意味や本質を把握できないまま使用されかねないという、(何事にも通じることであるが、) 困った事態を招いてしまう恐れがある。つまり、行われる形態・カタチが一人歩きしてしまい、「何を学ぶために」その形(楽譜)が作られたのか、「何を目的として」その練習が行われるのか。などなど、そのカタチを使用する人々からそれらを問われることのないまま、表面的にとらえられた乏しい内容のまま、学習に取り組みやすいという事態である。ではそもそも楽譜を読むとは、いったい何を読み取るべきなのだろうか。そのことをまず考察していくことにする。

第1節 楽譜を使用する目的

楽譜を使用する目的は何か。言うまでもなくそれは、これから学ぶ対象となる楽曲を把握するためである。楽譜を書き表す記譜法とは、「①音高②音価③旋律型あるいは動機④和音⑤楽器の奏法⑥強弱・速度・表情など、のいずれか1つ、あるいはそのいくつかを組み合わせで表示する」¹⁾ となっている。また、それには①表音譜と②奏法譜の2大分類があり、奏法譜はタブラチュア譜とも呼ばれ、楽器のための特殊な記譜法である。この奏法譜は、ウクレレやギターに補助的手段として使われており、勘所譜³⁾とも呼ばれている。つまり、その曲を楽器で弾くための要点、弾き方を書き表したものである。これに比べ表音譜である五線譜は、音高など、その楽曲全体を知るためには、非常に有効な方法ではあるが、とくに初心者たちが、楽器を演奏する、弾きこなすという観点から見れば、音符という不慣れな記号を連ねた表記法によって、あまりにも多くの音楽情報が煩雑に書き込まれ過ぎているといえないだろうか。(五線譜を見慣れない者にとってみれば、不可解な古代エジプト文字のように見えていても、まったく不思議ではない。)

ピアノ教育では、ほぼ100%近く、その学習の最初期から五線譜が使用されるか、あるいは幼児向けに書かれた教本でも、簡単な線譜から始め、五線譜へ徐々に近付くことができるように作成されている。しかし本来、楽器を弾くためには、とりわけ初心者たちにとって、注目すべき要点を記号として表記された、まさに「勘所」を示した奏法譜を補助的手段として使用する

るほうが、はるかに実用向きであり重宝されるものになるだろう。そう考えてみれば、現代のピアノ教育は、あまりにも五線譜に対する盲従的な信奉意識が過重になっているのではないかとと思われる。そのため筆者は本論文を通じて、少なくとも日本では、従来あまり考えられてこなかった、「ピアノ学習のための奏法譜」の使用を、初歩学習者たちの指導に強く勧めたい。なせなら、初心者が多くが五線譜へ対応する上で、音符という不慣れな記号を読みこなし、さらに手指をそれに従って頭と手とを同時に動かさなければならず、瞬時にさまざまな判断を強いられ、精神的にも肉体的にも大きな負担を負うという、大変に厚い壁に阻まれてしまう現実が数多く存在しているからである。この困難な現状を少しでも緩和させられる方法が、生み出されなければならないのではないだろうか。まるで文字の習得から新たな言語を学びはじめるかのような、初心者にとってきわめて困難な学習方法（その意味では誤った学習方法）が、いつまでも維持され続けている現状に、筆者は大きな疑問を感じずにはおれない。

第2節 奏法譜として数字譜を使用するメリット

前節で奏法譜は補助的手段として用いられるとの説明を紹介したように、筆者が提案する数字譜を使ったこの新しい形式によるピアノ学習法でも、まさに五線譜を読解する前におこなっておくべき、学習の補助的手段としてタブラチュア譜（奏法譜）を使用するというものなのである。「数字記譜法は習得しやすく、使いやすい」⁴とされている。したがって、学習の負担を軽減し、とりあえずその曲を弾けるという喜びを初歩学習者たちが体験するためには、まずは弾くための勘所・要点を視覚で捉えやすく表した奏法譜を使用するほうが、学習をより容易にすることができる。学習者にとって、楽譜を読むという不慣れな理屈や理論よりも、とりあえずよく知っている曲を何とか弾けたことが嬉しいことなのであり、それによって次の学習意欲が生み出されるのであるから。したがって、従来のように多くの場合、面白みのない初めて聞いた、課題学習として作られた知らない練習曲を、五線譜を解読しながら学習を進めるといった、面白みのない煩雑な学習から始める学習法よりも、弾くポイントを視覚的に示した勘所譜とも呼ばれる数字譜を使用し、まず現実には音にして弾けたよろこびを実感させるようにすることが、初歩学習者にとって楽しく取り組みやすい、最初期の最も有効であり必要な学習法といえるのではないだろうか。

これら2種類の楽譜を使う目的の中でも、ピアノを弾く上で一番大事なことは、現実には「指示されたとおりの音を、鍵盤でいかに間違えずに奏で、それを生きた音楽として演奏するか」である。前述したように、音楽は言葉と共通しているのであるから、「いかに話をしている状態に近い状態で、自らの意思を込めて、それらを音として表現できているか」ということが大事なのである。（この点について厳密に言えば、日本人のプロ演奏家による演奏といえども、残念ながら多くの場合、筆者にはその不十分さが伺えてならない。その大きな原因の一つに、この表音譜である五線譜を使い、多くの場合、生きた音楽でなく表面的なカタチから器楽教育が始まることに、少なからず原因があるのではないかと考えている。）

ではピアノを弾く場合、楽譜からいったい何を読み取るべきなのか。さしあたり音楽の内面

的なものを別にしてこれを考えてみると、大きく2つの方向から考えられなければならない。ひとつは音高や長さなどの音符情報（いわば劇台本に文字で書かれたセリフそのもの）。もう一つはどの指を使うかという、発音する媒体としての身体操作上の情報（ト書きのようなもの）である。この2つを同時に把握しなければならないという、特に初心者にとっては、情報量の多い非常に困難な課題を解決していかなければならない作業なのである。（このことをまず理解して生徒指導しているピアノ教師は、いったいどれほど多く存在しているのだろうかと思われるような現状が多くあり、その生徒たちの多くは悲惨な思いを強いられている。）現実には、このように楽譜に書き表された内面的な意味をほとんど教わらないまま、それら教師たちが幼い頃教わったとおりを踏襲するか、あるいは多少の工夫を加えられたにしろ、不十分な音楽内容の捉え方がベースとなったまま、ほぼ機械的・表面的に音符の種類や音名を教わるケースが多いのが実態ではないだろうか。

このような音楽への狭い把握のまま練習に取り組む学習のしかたでは、もともとその楽曲が持っている本質、つまり人の心をも豊かにしてくれるさまざまな音楽的な喜びや、あるいは聴く者に自然と伝わってくるものなどを遠ざけてしまうのであり、多くの場合、ただ単にミスをしたくないという、いわば外面的・表面的な「カタチ」の出来不出来でその課題学習の結果をとらえようとするに通じていくのではないだろうか。もしそうであるのなら、その再現された演奏は、台本どおりにいちおう役者によって語られてはいるが、人の心に響いてこない芝居のように、多くの場合、聴く人の心を揺り動かすようには響いてこないだろう。（しかし、我々日本人の周りには、このような「カタチ」を聞かせるようなプロ演奏家による演奏があふれていると筆者には感じられてならない。）

では上述した2種類の学習課題を、同時にこなさなければならないという困難な問題にどう立ち向かえばいいのか。それにはまず、それら2つの学習目標を、できるだけ把握しやすいよう、簡略化して学習者に与える方法を取ることが、初歩学習者にとっての最良の道ではないだろうか。したがって、筆者は次のような学習手段の提案をしたい。

- (ア) 学習対象の曲は、よく聞き慣れた子どもの歌（既知曲）を教材にする
- (イ) 音符や五線譜という不慣れな記号情報は、当分は使用しない
- (ウ) 必要な鍵盤に触れる指情報は、基本的に、わずか1～5の見慣れた数字により判別されるという、なるべく学習情報量の少ない教材を使うことにより、学習を容易にする（知っている歌により音価は把握されている）

これら3つの課題簡略化により、短期間でその課題が十分こなせれば、1曲であれ、即座に保育現場において実用として使っても、まったく問題はないだろう。さらにその結果、自信をもって弾けたという状態から生まれる心の余裕により、その音楽が持つ本来の表情を十分把握して、自らの演奏に聴き入りながら、表情をつけつつ演奏することさえできる可能性が生まれるのである。つまり、「カタチ」とらわれない、よりその楽曲が持つ本質的な楽しさに近づいた演奏ができる可能性が高まるのである。具体的なこれら学習法の詳細について

Fig. 1 J. Demus 氏所有の楽譜の一例 (Beethoven sonata Op. 26より)



ては、次章に譲ることにする。

第2章 数字譜によるピアノ学習法の提案 (I)

第1節 数字で読み取る音楽 (その1)

この章で筆者が示す、「指定された指番号どおりに指を使用する方法」は、実はウィーンの世界的なピアニスト、イェルク・デームス氏が実際にご自分の練習用楽譜に書き込んで使っておられる方法 (Fig. 1) であることをまず明らかにしておきたい。その楽譜には、時には反復音であってもまったく手抜きなく、また徹底して大半の音符に対し指番号が書き込まれているのである。あまりの生真面目さに対する筆者の疑問に対し彼は、「番号どおりに指を使えば間違えないから」との答が返ってきた。本論文で筆者が、初心者 of 初歩学習のために独自に提案する数字譜の使用法は、この偉大な世界的プロ・ピアニストが常用している、まさに「勘所」がわかるようにした、実用向きの優れた方法にその原点があることをまず明らかにしておきたい。

本論に入ることにしよう。手の健常者なら誰でも指は左右5本ずつ持っている。従来これを1～5の数字にして指使いがつけられていることは、もちろん筆者の示す方法でも同じである。ただし、ここで筆者が提案する独自の学習法と基本的に大きく違う点は、まず5線譜は最初歩の段階では一切使用しないことである。こう言うと、戦中戦後によく使われた、ハーモニカや歌謡曲などの楽譜が思い浮かぶかもしれない。しかしあれは、ただド～シという音を音符や階名を読む代わりに、誰でもわかる1～7の数字を当てはめただけのもので、5線譜の代用品のようなものである。これに対して筆者が使う奏法譜は、表音譜として数字で音を表すのではなく、使う指使いを1～5の数字で表した一種の勘所譜として使うのである。まずは具体的に、右手だけで学習する一例として、一般によく知られている「犬のおまわりさん」を次に示す。

1) 右手の一例

まいごのまいごの | こねこちゃん

右 3 1 1 1 3 1 1 1 | 4 4 3 3 2 — / /

(—は8分音符1拍分直前の音高を伸ばす、/は8分休符)

この曲の場合、基本的に1小節を8拍に記すが、4拍子という拍子記号は書かない。なぜなら、日本語は強弱アクセントの言語ではないため、拍子記号は意味をなさない。せいぜい1小節が4分音符何個で構成された曲であるかを表すだけのことである。学習者が既に知っている曲を扱うかぎり、無用な混乱を招く恐れのある拍子記号は、省略しても何ら差し支えはない。(特に日本の幼児は拍打ちよりリズム打ちが普通であり、普通の学校音楽教育を受けた大人ですら、意識していないとそうしかできない者も多いようである。)

この部分だけ見れば、いわゆる従来の数字譜と何ら変わりはない。ここにはド〜ソの音しかないからである。しかし、ラシや高いドの音は次のように表される。下段に階名を記しておく。 $\widehat{31}$ は1指へのすばやい替え指、 $\widehat{2}$ は1指の上を乗り越えて2指がくること、 $\widehat{2}^{(+1)}$ は前拍の1指より鍵盤1つ空けて2指を置くことを意味する。)

4 4 3 3 $\widehat{2}$ 1 5 5 | 4 3 2 1 $\widehat{2}$ / ~ 1234 | 5 / $\widehat{31}$ — $\widehat{2}^{(+1)}$ 5 — | 2 / $\widehat{13}^{(+1)}$ — 5 2 — |
f f m m r r l l s f m r d s m s d s m s r

なおこの奏法では、初歩段階ではあまり頻繁には使われないが、1鍵盤空けることを示した(+1)などのような指示がないかぎり、原則として1〜5指は常に上げないまま1本ずつ順に各鍵盤に配置されていることがきわめて重要である。そうすることにより、よく初心者がするように、指がうろうろ鍵盤を探すようなことはほとんど起こりえない。なぜなら、眼が見つめる先は手にではなく、常に楽譜に相当するこれらの指番号を見ていないと、次にどの指を使えばいいかがまったくわからなくなるからである。従来の5線譜を読み取る方法だと、多くの場合、初心者たちは完全に楽譜を読み取れていないのにもかかわらず、テンポに追いつてられないように次の指を動かさなければならないという心境に陥りやすく、そのためにミスを連発する羽目に陥りやすい。また、一応メロディは知っているため、鍵盤上を手探りしながらでも何とか弾こうと試みたりする傾向がある。そのため、瞬間的には読み取れない楽譜情報を見るよりも、そこから眼を離して、まだしもわかりそうな鍵盤を見ようとし勝ちになるのではないだろうか。あるいは、眼は鍵盤と楽譜を頻繁に交互に見ながら弾かねばならないという、非常に煩雑で困難な状況の中、学習しているのである。

筆者は実際にこの奏法譜を使って、ほとんど初めてピアノを学習するレベルの学生にいきなり試奏させてみたところ、まったく鍵盤や手を見ることなく、この指番号だけを手がかりにして、多少立ち止まりながらも、予備練習もまったくなしに、初回からはほぼ間違いなく弾くことができた。このように単旋律である限り、ほんのわずかな記号の意味がわかり、それらの約束事さえ守ってさえいれば、替え指によりド〜ソ以外の広い音域の曲も含め、複雑なリズムが使われないのであれば、ほとんどすべての曲が、1〜5の指番号情報を元にして弾けてしまうのである。ただし学習者が楽々と弾けるためには、その曲を口ずさめるほどよく知っているこ

とが前提条件である。このようにこの学習法の特徴の一つは、既知曲を使用しないと出来ない反面、それだからこそ楽しみながら学習することができるという点である。

2) 左手伴奏パターンの一例

④⁽⁺¹⁾ 1 1 1 ④ 1 1 1 | ⑤ 1 ④ 1 ⑤ 1 1 1 | ③ 1 ④ 1 ⑤ 1 1 1 | ⑤ 1 ⑤ 1 ④
 ④ s s s ④ s s s ④ s ④ s ④ s s s ④ s ④ s ④ s s s ④ s ④ s ④

これは同じ「犬のおまわりさん」の左手伴奏譜である。(上段は指使い。下段は音階名。④ = シ) 丸数字はベースを長音として音がのばされるが、鍵盤上に手の重さを適量かけた状態で行えば、手の重さが支えられているため、手は常に安定した状態に保つことができる。それにより学習者の心に生まれる安心感は、さらに、低音パートの音の移り変わりを、大部分が④ s / ④ s / というたった2つのパターンの組み合わせだと感じとりながら弾けることへと通じていく。それができれば、1本のベースラインとして感じることを可能にし、さらには音楽の機能(TSD)の流れを味わいながら曲を弾き進めるといった、より音楽的な演奏ができることも可能にするのである。

3) 両手

まいごのまいごの | こねこちゃん | あなたのおうちは | どこですか
 右 3 1 1 1 3 1 1 1 | 4 4 3 3 2 — / / | 4 4 3 3 2 1 5 5 | 4 3 2 1 2 /
 左 ④⁽⁺¹⁾ 1 1 1 ④ 1 1 1 | ⑤ 1 ④ 1 ⑤ 1 1 1 | ③ 1 ④ 1 ⑤ 1 1 1 | ⑤ 1 ⑤ 1 ④
 d s s s d s s s t s d s d s s s r s d s t s s s t s t s d

これら両手の学習を、片手ずつ十分行った後に、ゆっくりした速度で、少しずつ両手で弾ける部分を増やしていけばよい。できれば両手で弾く前に、歌詞を歌いながら左手だけ練習することを勧める。それは、頭の中で両手で弾いている時のイメージがつかめるからであり、いきなり両手で試奏するよりもスムーズにできるはずである。

第2節 補助的記号

前項ですでに登場しているが、本奏法譜では、指番号のほかに補助的記号が用いられる。

A. 記譜上の記号

- や ——— などは、それぞれ4分音符または8分音符1拍分や2拍分の音価
- / は4分休符、/ は8分休符
- ④ は4の指で弾いた鍵盤を押さえ続ける長音を示す。

B. 運指上の記号

- 替え指記号 $\widehat{3} 1$ は、一般に使われているものとまったく同じ。ただし、常に手の安定をはかるためと、手を閉じたままで必要な指が常にその鍵盤上に準備される状態を生み出すために、極力手は下げないで弾く。そのため、従来の五線譜に付けられている教材を

学ぶ時よりも、替え指の使用頻度は高くなる。

- b. (+1は鍵盤を1つ飛ばしてその指を準備する。初歩段階では(+1の頻度が最も多く(+2はずっと少ない。(+3はまれである。
- c. 1指の上を乗り越えて指を運ぶ右手の②や左手の③など
- d. 1指が手の内へもぐる①

第3章 既存の教本による応用と読譜へのアプローチ

～『バイエルピアノ教本』への応用～

保育士養成の教育現場の実情に対応するため、ここでは教材として最もよく使用されている『バイエルピアノ教本』を取り上げ、この新しい方法を適用してみることにする。ただし、これ以後の学習は、第2章までの学習がある程度こなせていることを前提にすべきである。そうでないと、「知っている歌を弾いて楽しむ」という、筆者が提案するこの奏法の大前提が崩れてしまうからである。

これから本章を進める前に、両手でピアノを弾く場合の、左右2つの手の動きの大まかな3つの基本的関係性を踏まえておきたい。周知のとおり、それは①並進行②反進行③斜進行であり、それぞれに上行と下行の組み合わせがある。すなわち、両手が共に上行または下行する形。両手が近づいたり離反したりする形。そして一方が同じ高さを保っている所へ近づくものと離れていくものなどである。特にバイエルなど、練習のための課題では、この点を学習者はよくよく見極めてから学習することは、大いに学習効率を高める助けとなるだろう。

第1節 最初の実習への取り組み例（第12番）

学習者が極力面白くもない練習曲をしなくても学習が進められるようにするため、原著から選択しつつ進めるのがいいだろう。ここでは一例を挙げるに止めておく。次の課題は「両手の練習曲」最初の12番である。

右手 1 2 3 4 | 5 4 3 2 | 1 2 3 4 | 5 4 3 2 | 1 2 3 4 | 5 4 3 2 | 3 1 3 2 | 1——|
左手 ⑤——|①——|⑤——|①——|⑤——|①——|⑤—①—|⑤——|

i) 課題の認識・確認

これを実習する前に、五線譜も参照しつつ、まず全体を見通しておく必要がある。とりあえず音符は読めなくても、同じパターンが山型に3回反復されたのち、最後の2小節で右手に変化が現れることを認識しておく。

ii) 課題を歌う

次に右手を3回同型反復練習をするが、このときにドレミ……と歌いながらすると、より課題の認識が確実になる。(音高は1オクターブ低く歌う。読譜練習を兼ねて行う。)

iii) 最後の2小節はそれまでと切り離して練習する。

いわば話の締めくくりの、別の語りをしている部分なので、ここだけを取り出して練習して

おく。前にならって、同じく歌いながらできるようにする。

iv) 左手の動きを確認

左手が動かなければならないのは、並進行の時のように左右どちらも同じドとソの音が来た所であると認識しておき、最後の2小節で左手はそれまでのパターンを短縮したものになっていることを確認しておく。

v) 右手旋律を歌いながら左手を弾く

実施する前に、使われる左手1と5の指で、ドとソを同時に鳴らしてみる。その後に楽譜どおり実施する。この時頭の中では、両手が合成された状態が把握される。この曲の場合、7小節目以外は各小節1拍目が左右とも同音なので歌いやすい。

vi) 最後に両手で弾く このとき、v.で行った時のイメージが再現できていればよい。

ここに示した練習順序が意味するところを以下に再確認してみる。①課題全体の把握と、どこで練習の区切りを行えばよいかを知る。②その把握したものを左右別々にパート練習を行ない。③その後2つを同時に認識できるよう学習を進める。④そのために左右別々に歌って課題を明確に把握しておく。⑤頭の中で左右が合成された状態を確認するため、より簡単な左手を弾きながら右手を歌う。⑥最後に合成された状態を両手で再現する。

要するに、学習内容を前もって確実に把握し、それを常に確認しながら実施することが求められる方法となっているのである。従来の学習で多くの場合、課題全体や個々の把握が不十分な状態のまま、学習者はせき立てられるかのように、テンポに追われてミスを多発しているのではないだろうか。ここに挙げた方法は、両手で同時に弾く学習に至るまでに、あまりにも時間がかかりすぎると思われるかもしれないが、不十分な力のまま先を急いでも、結局はいずれ挫折して行き詰まってしまうものであることを指摘しておきたい。そしてこの堅実な方法は、常に自分の感覚を見失わずに、確実に実力が蓄積される方法でもあることを述べておきたい。その結果、先に行くほどよりスムーズに学習が進むことになるだろう。

ここで筆者は、参照の対象として五線譜を使用したけど、やはり数字譜だけでは楽曲全体の流れは把握しがたいためである。最初の段階ではただ参照するだけではあるが、数字譜で弾けるようになってから、この五線譜を見ながら弾いてみることにより、五線譜への読解力も徐々に身についてくるものと思われる。それは、しゃべることができるようになった幼児が、その言葉を文字で確認することにより徐々に文字の形を覚え、それらに触れる機会が多くなるにしたがい、やがて自然に文章が読み書きできるように育っていく順序とも共通するだろう。その意味では、よく知っている歌を、数字譜だけではなく、五線譜でも学習する段階を経ることが、より自然なプロセスとなるのである。もし時間的な余裕があれば、ぜひその過程を通りたいものである。

この最初の課題以降も、基本的な上記①～⑥の段階を踏まえて学習することにより、確実に実力を積み重ね蓄えながら、読譜の能力を伸ばしていくことができるだろう。

第2節 音楽の流れをつかむことで、より効率のよい学習をするために

①音楽の骨組みを弾く

音楽には、骨組みとなる音の動きがあり、他方では装飾として働く音たちがある。例えばバイエルの17番

R 1——|5——|4——|3——|1——|5——|4-2-|1——|

L 3 1 3 1 | 3 1 3 1 | 4 1 4 1 | 5 1 5 1 | 3 1 3 1 | 3 1 3 1 | 4 1 2 1 | 3 1 5 —|

の場合、左手1はすべてリズムを刻むための伴奏でしかない。これを省略してみると、

R 1—|5—|4—|3—|1—|5—|4 2|1—|

L 3 3 | 3 3 | 4 4 | 5 5 | 3 3 | 3 3 | 4 2 | 3 5 |

となり、さらに左手連打音を省略すれば

R 1—|5—|4—|3—|1—|5—|4 2|1—|

L 3—|3—|4—|5—|3—|3—|4 2|3 5|

となる。これによると、2～4小節と最後では左右が並進行（下線数字）し、後半の7小節目では、左右同じ2と4指による反進行が見られる。このような骨組みにして弾いてみれば、音楽の流れをより明確につかむことができるだろう。そこには右手がドから一旦ソに駆け上り、3音だけではあるが、徐々に下降してくることによる、緊張の心地よいほぐれが感じられる。しかし、これをすべて等質な音量や音色で弾いていては、この心地よさは到底感じられないだろう。このように、最初歩であっても、十分音楽的に演奏することが可能だが、ただ先を急ぐだけの学習法では、音楽的な表情を感じながら弾くという、面白みや楽しみもそこにはないし、それでは次の学習への意欲もわきにくいにちがいない。

②並進行・反進行・斜行を見分けて弾く

上の例にもあったが、特に2と4の同じ指同士による反進行がよく使われる。左右同じ指を動かすことは、異なった指同士を動かすことに比べれば、より容易だといえる。それを意識的に行えば、困難さをさらに軽減することができる。また、同方向へ移動する並進行、さらに一方が静止した状態の所へ他方が近づいていくか離れていくか（斜行）を見極めることにより、それらを意識的行なうこともまた、演奏を容易にすることができる。それだけでなく、その動きを把握していることにより、緊張感の高まりやその弛緩も感じ取りながら、それらを楽しみながら弾くこともできるのである。

このように、さまざまな感じ取りが、音楽に豊かな表情を与え、弾く者にもそれを聴く者にも、心地よさを与えてくれるようになる。これらの延長上に、次の課題に取り組む意欲と、豊かな表現力が蓄えられていくにちがいない。

第3節 バイエル後半の曲の一例（第78番）

次に例えば78番を取り上げてみる。この曲は拍子が6/8。右手が6度音程による連打とその3度上への移動。4と2の間の4度拡張。中間部の5度上（4度下）への転調と左5指による低音保持。これらの他に、左手レガート、右手 *f* と *dolce* の弾きわけ。それに最後の部分で *p* から急速な *f* への *cresc.* などが主な課題である。これだけ多くの課題を数字譜だけで表示する

ことは極めて困難であるが、まず指使いだけを書き出してみることにする。6/8拍子のため、8分音符3つをひとまとめに書かなくてはならない。ここでは仮に[555]のように表示するとしよう。最初の4小節だけ、右手は音名と共に記せば次のようになる。重音の部分は2段表記。

s t t l m s# f r l s r t

R [555] 5 / / | [555] 5 / / | [541] [3#21] | [542] 1 / / |

R [111] 1 / / | [111] 1 / / |

これに替え指を記せば

(+1 (+1 (+1 (+1 (+1

R [555] 53 / / | [555] 5 / / | [541] [3#21] | [542] 1 / / |

R [111] 1 / / | [111] 1 / / |

次に左手は、弾く前に使われる3和音を確認しておく必要がある。この4小節間で使われる和音は、コードネームで書けばGが主であり、それにC_{on}Gが1回とG_{sus4}が経過音的に1回だけ現れる。これらをまず鍵盤上で指定の指使いと共に押さえて確認しておく。ここで注意すべきことは、Cの時に2指が使われ1指との間はとなることを記憶しておくことが必要である。またG_{sus4}は1指の(+1が解除され、次のGを1音だけ先取りしていると読み取るのが、音楽的に捉える上でも適切だろう。ともかくこの3種類の和音とその使われる場所を、右手の旋律と共に、十分把握しておく必要がある。そのため、ここでも左手でコードを押さえながら右手を歌う学習が重要である。その際、固定ドで歌うことが難しいのであれば、ラララで歌ってもいい。メロディを空で歌えるほど把握しておくことが重要だから。これだけ十分片手ずつの準備をした上で、はじめて両手で弾く練習に入ることが望ましい。

続きの4小節もほぼ同じようにして弾ける。中間部についても同じ要領でできるためここでは省略するが、左5指によるベースの保持は、ただ鍵盤にもたれるように手の重さを載せていれはすむことである。そのリラックスした手の使い方がなければ、2・3拍にかけてのスラーが表現できない。

第4節 五線譜による学習

上例のように、少し複雑な要素や奏法になると、もはや簡易な表現による奏法譜では不十分になってしまう。ただし、片手練習のために使うのであれば、まだ十分活用することも可能である。しかし、バイエルも後半になると、どうしても五線譜に対峙しなければならない。そのため、この段階までに、学習者は五線譜への対応ができるよう、これまで弾けた曲を、五線譜で弾く練習を積み重ねることで、五線譜の読譜力を養っておかなければならない。本論の中でその方法を述べるのは脇道にそれるため、ここでは詳しくは触れないが、すでに序章の中で、あらかたその学習への取り組み時期とその方法について述べておいたつもりである。

この段階では、教材はもはや完全な五線譜を使用するが、当分はこれまで学習してきた指番号を目で追う方法を中心にして、音符は参考程度に見るに止めたほうがいだろう。そのため、

五線譜に書かれる指番号は、市販されている既存の大きさよりもよく目立つよう、より大きく表記されなければならない。(Fig. 1 参照)

したがって、ここで使用される五線譜でのバイエルは、表記される音符や五線譜に関してはすべてそのまま使用されるが、指番号については、やや大きい文字サイズを使用し、しかも、和音も含め、すべての音符に対して1～5の数字を表記したものを使用する。これは序章で紹介したデームス氏ご自身の練習用楽譜にならったことでもある。それに加えて、筆者が提案する、指の動きに関する指示記号の表記も必要である。さらに和音、特に左手の和音については、分散和音は一つの和音につき必ずすべての音を同時に弾いて、使う指と鍵盤を確認しておいたほうがよい。そのためできれば楽譜には、それを一つの和音形にして記入しておくのがよいが、学習者自らにそれらを記入させたほうが、教育的効果が高いだろう。以上を次に整理する。

- ①五線譜はそのまま使用する
- ②指番号は和音も含めすべての音符に対応させて、大きめの文字サイズで表記する
- ③指の運び方を示した記号を表記する
- ④和音はその構成音をすべて同時に弾く形を表記する（学習者が記入する）

これ以後の学習段階では、基本的に常に五線譜を使用するが、必要に応じて、本論で述べた補助的表記を記入しながら、より学習しやすい楽譜にして学習すれば、学習者の負担が大きく軽減するに違いないだろう。

おわりに

この小論は、五線譜に基づかないピアノ学習法を提案した、筆者の最初の試みであり、まずはその概略を紹介した。第3章の例のように、指番号を中心にしたこの奏法譜では、少し複雑な曲になると、その表記法がきわめて困難になってしまうという限界がある。しかしこの方法は、最初歩の単旋律による学習段階を円滑に進める、導入期の方法としてはかなり有効な方法であるといえる。その後の対策としてに、必然的に徐々に五線譜を読み取れるよう移行していかなければならない。

すでに序章で述べたとおり、本論で筆者が指番号表記を中心にした独自の奏法譜を提案したのは、次のような実情に対応する必要があると考えたからであった。すなわち、従来多くの保育士養成機関で行われているような、理解も追いつかないまま、いきなり解読困難な五線譜を読み解く羽目に追い込まれるという、学習者たちの消化不良という現実である。ただひたすら実技試験というハードルを乗り越え単位取得するために、闇雲に追い立てられ苦しみながらピアノを学習している学生たち。そんな彼・彼女たちの大きな助けとなり、かつ即戦力ともなって役立てられる学習方法として筆者が考え出した、より容易で合理的な学習方法であり、しかも少しでも音楽的表現力のあるピアノ演奏ができるためのアイデアなのである。今後、さらに具体的な保育ピアノ教材の開発へとつなげていく中で、個別の問題を解決する必要性が起きてくるだろう。引き続きそれらへの対策を立て、具体的な学習方法として展開していく予定である。

最後に、日本のピアノ教育界の中で、筆者のこのような新しい提案を、邪道のようにみなす人々に出会うことがある。日本のピアノ教育界は、東京芸大や桐朋を頂点としたピラミッドを形成し、あたかも東大や早慶大を頂点とする入試を目指す、一般大学への受験教育界と同じような構造を持っているとみることができる。最高学府を目指すべき学力を得られないまま、その途中で多くの受験生がそれぞれのレベルに応じたランクの大学に吸収されていくのであるが、ピアノ教育界もほぼ同じ状態であるように見える。しかし、音楽という精神面の表現芸術の世界は、音楽的センスを養うことを必要とする、実技を中心とした技術教育の世界であり、一般教科の勉強と同等に扱うべきではない。ところが日本のピアノ教育界では、あたかもアカデミックな道（ただし、それらの指導者たちが単に漠然と幻想的にイメージしているだけにすぎないことが多いのだが、）だけが正道であり、それに外れるものはすべて邪道であるかのように決めつける人々がいる。ところが、そのような「信奉者」たちの生徒のうち、いったいどれだけの人数が真に正統な芸術的演奏ができる音楽の表現者として成長しているのか、はなはだ疑問である。なぜなら、頂点に到達できないどころか、底辺の学習者たちのほうが、圧倒的に多人数なのだから。とても目指すべき正統な演奏表現力を学習できているとは思えないからである。

昨年盲目の若いピアニストが、難関のクラヴァーン・ピアノ・コンクールで優勝したが、果たして彼は幼児の頃から五線譜で学習していただろうか。とてもそれは考えられないことである。にもかかわらず、彼は喜々としてピアノ練習に励み、あれだけの快挙を得られたのである。この動かし難い事実を見ても、五線譜なしで学習を始めることに、何の弊害もないことはあきらかである。

筆者はアカデミックな学習を決して否定はしないし、できればその結果として芸術的表現力を備えた演奏が全員できるようにいつかはなっしてほしいと思う。だが、保育士をめざして、大学一年生からピアノを始めた学生たちにとって、現状は芸術的な演奏はほとんど無縁のものであり、目の前の差し迫った課題であるバイエルや、実習に間に合うよう、幼児向きの保育教材を弾けるようになることのほうが、はるかに切実で重要な問題なのである。学習の導入期から芸術的な演奏へ向けてのピアノ学習は、ツィグラーやR. カヴァイエが指摘するように、当然重要なことではあるが、1年半～2年未満という短期間で保育士としての課題をこなし、同時に芸術的演奏を目指すことは、その指導時間と学習期間の短さからいっても、とうてい不可能なことである。したがって、このような過酷な条件であっても、途中で挫折してしまう学習者を減らし、より大きな学習成果をもたらすことのできる効果的な学習法が、どうしても必要なのである。

注

1. 小泉文夫 1994『音楽の根源にあるもの』平凡社 p. 137（原著：1968 レコード解説）に諸説記載
2. 皆川達夫 1982『音楽大事典』平凡社（記譜法）p. 683
3. 村井範子 1982『音楽大事典』平凡社（タブラチュア）p. 1436
4. 村井範子 1982『音楽大事典』平凡社（数字記譜法）p. 1282

（原稿受理 2010年9月21日）

付録

犬のおまわりさん

ま	い	ご	の	ま	い	ご	の	こ	ね	こ	ち	ゃ	ん	—	/	/
右	3	1	1	1	3	1	1	1	4	4	3	3	2	—	/	/
左	④	ソ	1	1	④	1	1	1	⑤	1	④	1	⑤	1	1	1

(+1)

あ	な	た	の	お	う	ち	は	ど	こ	で	す	か	—	お	う	
4	4	3	3	2	1	5	5	4	3	2	1	2	1	—	1	2
③	1	④	1	⑤	1	1	1	⑤	1	⑤	1	4	—	/	/	/

ち	—	—	を	き	い	て	も	わ	か	ら	な	い	/	な	ま
3	—	—	3	3	—	3	1	4	4	4	3	2	/	2	3
④	1	1	1	④	1	1	1	⑤	1	⑤	1	5	—	/	/

え	—	—	を	き	い	て	も	わ	か	ら	な	い	—	/	/		
4	—	—	4	4	—	4	2	5	5	5	4	3	—	1	2	3	4
⑤	1	1	1	⑤	1	1	1	⑤	1	2	3	4	—	/	/	/	/

ニ	ャ	ン	・	ニ	ャ	ン	・	ニ	ャ	ン	・	ニ	ャ	ン	・	ニ	ャ	ン
5	・	3	1	・	2	5	—	—	2	・	1	・	4	1	—	—	—	—
⑤	—	—	—	2	2	—	—	—	2	—	—	—	5	5	—	—	—	—

(+1) (-1)

な	—	い	て	ば	か	り	い	る	こ	ね	こ	ち	ゃ	ん	—	/	/
1	—	1	2	3	2	1	2	5	3	5	4	#2	3	—	/	/	/
③	—	—	—	3	—	#4	—	—	3	—	4	—	1	2	3	4	—

(-1)

い	・	ぬ	・	の	—	—	—	お	ま	わ	り	さ	ん	—	/	/
1	・	3	・	4	—	—	—	2	5	4	2	1	—	/	/	/
5	—	—	—	3	—	—	—	5	—	3	—	1	—	2	—	—

(+1)

こ	ま	っ	て	し	ま	っ	て	ワ	ン	・	ワ	ン	・	ワ	ワ	ン
3	4	—	2	1	2	—	3	4	・	1	・	2	1	5	—	—
3	—	—	—	2	—	—	—	1	—	1	—	2	2	—	—	—

(-1) (+1) (+1) (-1)

ワ	ン	—	ワ	ン	—	ワ	ワ	ン
4	・	1	・	3	1	—	—	
1	—	1	—	5	5	—	—	

(-1)

2・8va

前	5	3	3	4	5	3	3	4	5	2	2	3	4	2	2	3
間	①	3	3	2	1	3	3	2	1	3	3	2	1	4	3	1
奏	5	—	4	—	4	—	4	—	4	—	4	—	4	—	4	—

2・8va (+1)

5	—	4	—	4	—	4	—	4	—	4	—	4	—	4	—	4	—
④	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	

(+1) (8va下)

- 注
- : のばす
 - ・ : スタッカート
 - / : 8分休符
 - (+1) : 鍵盤1つ分手を広げる
 - (-1) : 鍵盤1つ分手を縮める
 - 31 : 替え指・置き換え
 - ⑤ : 5指押さえたままで
 - ↗ : 1指の上を越える